
ONE PIECE ~ 隠された島と侮辱の塔 ~

邪餽 珀磨

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ONE PIECE ～隠された島と侮辱の塔～

【コード】

N2671E

【作者名】

邪餽 珀磨

【あらすじ】

ウォーターセブンから出航した後、ルフィ達一行は次なる島を目指していた。その航海の途中、Dと名乗る者に出会い・・・

第一話：『D』を名乗る者（前書き）

投稿が遅れがちになると思いますが、根気よく付き合ってくださいと嬉しいです

第一話：『D』を名乗る者

青い空、燦々と輝く太陽、それに反射して海も輝く。その海に漂うのは、黒い布地に骸骨が描かれた旗を掲げた船。

そう、海賊船。

大きなライオンが目立つ海賊船。その名も、サウザンドサニー号。この船の船長、モンキー・D・ルフィは勿論のこと、船員全員が賞金首という世間では騒がれる海賊の一つである。

今日もまた、記録指針ロクボースの示す道筋の航海が続く。

「サンジ〜！オヤ〜ツ〜！」

夏島が近いのだろう。潮風が心地良く、船員達は昼食後の一時を甲板で過ごしていた。

先程食べたばかりだというのに、船長のルフィはオヤツをコックのサンジにねだる。

この場合、誰も何も言わないのが得策なのだが、今日は違った。

・・・と、いうよりも皆が言っているのは、オヤツ処の話ではなかったのである。

『海獣』である。

それも、サニー号を丸呑み出来そうな程の巨大な海獣。

呑気なルフィは瞳を輝かせ、歓喜の雄叫びを上げているが、直ちに船員3名が船内へと逃げ込んだ。

船医チョッパー、狙撃手ウソップ、航海士兼泥棒ナミの3名だ。

外ではルフィ達の必死に闘う声が聞こえてくる。
が。

その声が急に途絶えた。

もし、勝ったのならルフィの喧しい声が、サンジの暑苦しい歓喜の報告があるはずなのだが・・・それすら無い。

まさか・・・。

と思い、ナミとウソップは窓から外を覗く。

皆は無事だった。

海獣は真っ二つに裂かれ、甲板に倒れ込んでいる。

ただ、そこには見知らぬ者がいた。

褐色・・・いや、もっと黒い。その肌とは違って真っ白な髪。

そこからでは、それしか分からなかった。

それは、一瞬の出来事だった。

出てきた海獣はただデカイだけではなかった。
デカイから故に尋常ではない防御力。その防御力が全員の攻撃を
弾き返していた。

つまり、海獣のダメージは0である。

「あばよ」

その声の後に海獣の生きた姿は見られなかった。

真っ二つになった海獣を土台にするかのように立ち、声の主は現
れた。

褐色よりも少し黒い肌。真っ白な髪。深緑の右目に虹色の宝石を
埋め込んだ左目。

そいつは、殺気をむき出しのままニッコリと微笑んだ。

「初めまして” 麦わら海賊団”。俺は『D』。あんたらと同じ賞金
首だ」

「お、お前っ・・・!？」

「よう。久しぶりだな、ゾロ」

親しげに挨拶を交すD。

その時だけは殺気を消し、また再び殺気を放つ。

その外見では考えられない程の威圧感に、冷や汗が出る。

それは、ルフィも同じだった。

隠れているナミ達は動けずにいた。

「おい、マリモ。こいつ知り合いか？」

サンジが煙草に火を点けながら、マリモ・・・基ゾロに聞く。

ふー・・・と吐き出された白い煙のように、消えそうな声で返事をする。

「アイツは、俺と同じ『海賊狩り』だ」

ゾクツと、殺気が一段と増したのを感じる。

「おい、どうでもいいがその殺気を消せ。話し難い」

その言葉と一緒に、Dの殺気が消え失せた。子供のような笑みで、手をパタパタと振り”ジョーク、ジョーク”とふざけた様子で言った。

その瞬間を狙っていたのか、キッチンに隠れていたナミが賞金首のリストを持って甲板に現れた。

「お前が”泥棒猫”か・・・で、あんたが”悪魔の子”。お前が”麦わら”。その海パンが・・・」

と、Dは顔と名前を確認していく。

Dの周りには宙に浮く”麦わら海賊団”の賞金首のリスト。

これを見て、ルフィ達は確信する。Dも、悪魔の実の能力者だと。横目で見ていたゾロは呆れた様子で頭を抱えた。

「ん？どうしたんだ、ゾロ」

その若干な異変に気が付いたルフィが聞く。

「D。お前また喰っただろ・・・」

「おう！大変不味かったぜ。これで6つ目だな」

6つ目・・・つまり、悪魔の実を6つ食べた、ということになる。

だが、それはあり得ない。

そのことに気付いたロビンが待ったを掛ける。

彼女は考古学者。

趣味は読者。ある本の一説にはこう書かれていたという。

『悪魔の実を2つ口にした者はそれ以上、悪魔の実に触れることは許されない。もし、触れようとするものならば、その身体ごと消滅してしまうであろう』

そんな話をしていても、Dはニシシシ・・・と笑っていた。

まるで、自分には関係のないことだというような笑みだ。

Dは笑いながら説明した。

自分は普通の人間ではない、という。

Dは一族には生まれてはいけない存在だった。

生まれてすぐ、一族の掟により殺されることになった。

だが、血を流してはいけない。だから、一族はあの伝説を試した。そう、ロビンが言っていたアレのことだ。

本当なら、そこで潰える命のはずだった。だが、一族は己の眼を疑うことになる。

3つ目の悪魔の実を与えたその時、それはすぐ吸収されたのだ。

一族は生まれて間もない、一族の恥とされるその赤ん坊を生かすことを決意した。

その時の赤ん坊がDなのである。

「……ってな訳だ。一族の奴等は俺のことを”悪魔の愛子”って呼んでるぜ」

一通りの説明が終わると、Dは新たに話を始める。ズバリ、ここに現れた理由である。

Dは甲板に正座し両手を着く。しっかりとルフィの瞳を見つめ、理由を述べる。

「麦わら！俺をこの船に乗せてくれ！頼む！！」

つまり、仲間にしてほしい、ということだ。

ルフィが強い奴を目の前にして、NO、と言っはすもなく……。

「いやだ」

あり？

断りやがったぞコイツ。

「じゃあ、手伝ってくれ」

「いやだ」

「この海獣やるから」

その一言に、否定で一点張りだったルフィの瞳の色が変わったのは言うまでもない。

珍しく悩んでいる仕草を見せ、やはり、食欲には勝てず……。

「よし！わかった！！」

そう言ったルフィの瞳は既に目の前の海獣の肉塊を捉えていた。

Dは海獣を引き上げ、背中の大剣で細かくカットしていく。

先程まで、船ごと呑み込みそうだったソレは、ルフィに全て呑み込まれそうな程と化していた。

「よし、なら俺はドコに寝ればいいんだ？」

Dの台詞に、ナミが眉をひそめた。

勿論、客室……と言いたいところだが、一応仲間になったことだし遠慮されるのも癪だ。

「男部屋なら船尾側よ。……どうしたの、ゾロ？青い顔しちゃって」

ゾロはただ首を横に振る。

そんなゾロはほったらかしにして、ナミは船内の説明を続けている。

その様子を見ながら、Dはクスクスと笑っていた。

「・・・で、女部屋がその下ね。こんなもんかしら」

「じゃ、俺もそこでいいな」

そう言っただけで歩き出すDをサンジが待ったをかけた。

Dが向かった先が気に入らなかつたのである。

Dが向かった先は女部屋のある廊下。

レディの部屋に男が足を踏み入れることはあつてはならないと思つているサンジには許せないことだつたのだ。

若干、青筋が浮き出ているサンジを目の前にして、Dはキョトンとして首を傾げた。

「なんでだ？」

「なんで・・・ってお前、恥ずかしくないのか！レディの部屋にあまり込むなんて！！」

Dは更に首を傾げた。

サンジが何故、青筋まで浮かべて怒っているのかが分からないのだ。

「別に恥ずかしくないが？」

その言葉にサンジはショックを受けた。

ここまで堂々と言えるDに対して、呆れを通り越して尊敬しそうになる程だ。

そのショックをブツブツと囁くサンジを余所に、Dは疲れた様子で口を開いた。

「同性同士よろしくな、ロビン」

・
・
・
。

「……え？」

一人の人間が言ったかのように、サンジ、ナミ、フランキーが声を揃えた。

今、はっきりと聞こえた。

ロビンは当たり前のようにニッコリ笑っているけど、はっきりと聞こえた。

……女？

「「「えええー！っ！?!?!?!」」」

二話目に続く

第二話・隠された島（前書き）

5月中に出す予定が、6月になってしまいました！
マセンでした！

遅れてスミ

第二話・隠された島

少々、曇った空模様。

時化が近いのか、ナミは少し落ち着かない様子で昼食を取っている。

今日の昼食は昨日の海獣のマリネに麵を炒めたもの。デザートには蜜柑のスカッシュ風ゼリーが用意されていた。

ルフィは勿論既にたいらげ、甲板で昼寝の真っ最中だ。

「んで？お前の手伝ってほしいことってのは？」

もによもによと食べながらウソップが訊ねた。

口いっぱいに含んでいたゼリーを呑み込み、Dはその問いに答え
た。

「・・・復讐・・・」

一瞬、場の空気が凍ったような感覚に陥った。

サンジは洗い物の手を止め、ウソップは口の中にあつた物をゴクリと呑み込んだ。

「そいつは、俺だけでなく母まで殺そうとした奴なんだよ。・・・
もう、昔の話だがな」

食事の最中にすまない、とDは謝り席を立った。

それと同時に、ルフィの声が聞こえる。
この声は、とんでもないことが起きる予兆だ。
そう感じた船員全員が甲板へと急いだ。

『なっ!?!』

皆が目撃したモノ。それは、巨大な黒雲。
先程まで姿さえ無かったはずのモノだった。
ルフィはいつもの調子で瞳を輝かせているが、Dはすぐさま撤退
の声を掛けた。

「D!?!あなた、アレが何か知ってるの?」

ナミさえも知らないソノ黒雲を睨み付けながら、ただ、コクリと
頷いた。

皆の視線がDに集まる。

静かに、だが、緊張した様子でDの口は開いた。

「アレは【海雨^{かいう}】。その名の通り、海水の雨だ」

それを聞いて黙っている訳がない。

ナミはサンジとウソップに帆をたたむよう言った。
続いて、Dは能力者のルフィ達を避難させる。
フランキーは黒雲を脱け出す準備に取り掛かる。

「ナミ!お前は先に戻ってる。・・・嵐になる」

「え、ええ……。分かったわ」

駆け足で戻ろうとするナミに、強風が襲いかかった。小枝のように細くて軽い体は、いとも簡単に空へと舞い上がった。ナミの悲鳴が風の音と共に聞こえた。

「えっ？・・・きゃあー！」

がしっ！

そう、音が聞こえたかと思つた瞬間、ナミに重力がかかる。何かに引き寄せられるような感覚を覚える。

「ちょ・・・、D!？」

引き寄せたのはDだった。耳元で”ゴメン”と呟いたかと思つとまた別の重力がかかる。今度は堕ちている。

「サンジ！ナミを頼むー！」

そう言うと、サンジはナミを受け止めてすぐに避難する。Dはなんとか態勢を保ち、甲板へと戻って行った。

「フランキー！準備はいいか?！」

「おお！いくぜ〜」クド風来”・・・”

Dの合図の声に、フランキーの威勢のいい返事が返ってくる。コーラ樽を3つも使うその名を口にする。

「バースト」！！」

強風と共に吹き付けてくる海雨によって、荒れる海をかき分けてサニー号は直進した。

何かにしがみついていないと立っていられない程、サニー号は重力の抵抗を受けていた。

「~~~~っ！！」

外にいるゾロとDには酷なものだ。

特に、能力者であるDは……。

異変に気付いたゾロがDの名を叫ぶように呼んだ。

「D！！」

だが、力の抜けたDの身体はフラつき、船の揺れは修まる様子もない。

なんとか意識は保っているようだが、そう長くは持たないだろう。

「っクソ……！！」

離れてしまっていたゾロは手を伸ばす。だが、あと少しの所で届かない。

思わず短い嘆きが口から出た。

あと半歩……。

あと……。

そして、漸く手が届く。

急いで船内に戻ろうとするが、吹き付けてくる海水と強風がそうさせてくれない。

女一人くらい、ゾロにとっては軽いものだ。

だが、だからといって簡単に引き上げることは不可能だった。

原因はDの持っている武器にあった。

彼女の武器、通称『零式^{れいしき}』は大剣であり、その重さは凡そ人間二人分。

今のゾロに計三人の人間がぶら下がっているという状況だ。

それでもゾロは諦めなかった。

歯を喰い縛り、腕に血管が浮き出るほど力を入れる。

「くっ……のおおおおあー!!」

必死に腕を掴み、一気に引き上げた。

それと同時に嵐は消えた。

急に消えた雨風に戸惑いながらもゾロはDを抱えて船内に戻った。急いでチョッパーを呼び、看てもらった。

「……ナ……ミ……」

意識が朦朧としているのだろう。端切れ悪く、近くにいたナミを呼んだ。

Dは外を指差し、ぼそぼそと何かを言っていた。同じことを何度も繰り返し返してだ。

「……………」

漸く聞こえたかと思うと、そこで意識を失った。

ナミは驚愕としていた。

【偉大なる航路】グランドラインを渡る者にとって、それは無謀となることだったのだ。

「…………北東に向かえ…………？」

今、ログが示している方向は西。

ナミは急いで帆を広げる指示を出し、舵をきる指示を出す。

Dの言った通り、北東に向かって船は進み始めた。

それから一夜明けで、漸くDは意識を取り戻した。

Dはゆっくりと身体を起こした。
傍らには、ウソップとチョッパーが静かに寝息をたてていた。

「・・・ありがとう、な」

助かったと確信して、静かに言った。

Dは二人に毛布を掛けると壁に立て掛けてあった『零式』を取り、甲板へと足を運んだ。

「D！大丈夫なのか？」

心配そうな顔で真っ先に声を掛けて来たのはゾロだった。

あたふたとした様子で、冷や汗をダラダラと流す姿に思わず笑ってしまう。

「てんめえ、心配してるってのに！！」

いつものゾロに戻ったと、Dは意地悪そうに大笑いする。

二人の会話に誘われるかのように、他の皆も集まり始めた。

回復したDの姿を確認すると、皆が祝福してくれた。

一通りの祝福が終了すると、主役のDが咳払いの後に、さて・・・と話を切り出した。

「あと数時間で、あの島に到着する」

ONE PIECE ~隠された島と侮辱の塔~

海軍である。

「なんで海軍がこんな所にいい!？」

ナミの悲痛な叫びが静かに響いた。

第三話：【バベル】

ナミの悲痛な叫びも虚しく、確実に海軍は目の前にいる。

「……よく、辿り着いたなあ」

ナミとは真逆で、Dは感心した様子を見せる。

船同士はそんなに離れてはいない。

こちらから確認できるということは、あちらも同じということになる。

海軍の方からは、はっきりとまではないが大きな怒鳴り声が聞こえる。

その声の主は何本もの葉巻を口にくわえて、首や額に青筋を浮かべていた。

「あそこが一番安全なんだがなあ……。仕方ない、おい。チョッパー、舵を切ってくれ」

「お、おお……。！」

一瞬戸惑いを見せるチョッパーだったが、Dの指示に従って舵を切る。

暫く進むと目の前に削り創られた洞窟が現れた。

「あそこよりは劣るがまあ、安全な場所だ。奥の方には蝙蝠が住んでいるから、あんまり近付くなよ」

薄暗く、外の光も僅かしか入らない洞窟に船を止め、Dを含む”麦わら”の一団は漸く地面に足を着けた。

まず向かう所は、森の中だった。

森に入った途端、一団は暑さに襲われた。

ジメジメとした嫌な汗が頬を伝う。

「流石にカブは暑いな・・・」

「・・・カブ?」「」

皆が同時に首を傾げる。

若干だが、発音が違って『蕪』と聞こえるためか、Dが訂正を加える。

「違う違う。夏部だ、夏・部」

Dの説明によると、この森の辺りは『夏部』と呼ばれる暑い気候のエリアで、その他に『春部』、『秋部』、『冬部』のエリアに分かれているのだという。

つまり、一つの島に全ての季節が集まっているというのである。

「で?これからどうするの?」

あまりの暑さに少しイラッとしたナミが溜め息混じりに聞いてきた。

「親父に逢いに行く」

Dは静かに、殺気を放ちながら言った。
その場にいる全員がビリビリとそれを感じ取り、ゾクゾクと悪寒を察し身を震わせた。

「……させねえよ」

その声は、皆の背後から聞こえた。

殺気の満ちた声。

姿を見せる様子もなく、声の主はDを貶す言葉を投げ掛ける。
それを聞き流し、一つ質問をした。

「何故、お前がここにいる？」

「親父に頼まれたのさ。悪魔の愛子を観て来いってな」

Dは深い溜め息を吐き出した。

肩をガツクンと下げ、背中を曲げて、大袈裟な程呆れているのがよく分かる。

声がだんだん近付いて来る。

ずっと喋り続けているその声の主は、すぐ後ろの茂みの中から現れた。

Dに少し似ていて、少し年上を思わせる顔と体格。

髪の色は空のように澄んだ青、瞳は爽やかな緑色の青年だった。

「珍しく帰って来たと思えば、やっぱりあの女の仕返しか」

そう言われたDから、身体中に殺気をビシビシと感じるようになる。

Dは何も言わず、ただソイツを睨み付けていた。

ソイツもそれに気付いた様子で、おいおい……と額の冷や汗を袖で拭う。

「自分の兄貴に向かってすることじゃないだろ？」

「黙れ。貴様を兄と思ったことなど一度も無い」

ソイツも殺気を放ち、Dと火花を散らした。

その光景を目の当たりにしながら皆は動けないでいた。

否、一人だけ違った。

麦わら帽子のその人物は、そこら辺に生えたキノコをモシヤモシヤと食べ始めていた。

如何にも毒々しい派手な色のキノコを、巨大な胃袋へと納めていく。

Dと男の殺気がみるみるうちに薄れていった。

「アホらし……。やあめた、やめた。俺は帰るぜ、【バベル】にな」

「何？完成したのか!？」

殺気とは違った気まずい空気。

それを掻き消したのは、一人キノコを食べているルフィの他にも

う一人。

青年と同じ方向から聞こえる、茂みを掻き分ける音がしたかと思うとクリンとした瞳の少年が現れた。

少年は青年を見つけると嬉しそうな顔をして、すぐ不機嫌な顔になる。

「やっと見つけた!」

「おう、H。^{エイチ} どうした?」

Hと呼ばれた少年は、あからさまに怒ってみせた。

そして、青年に早く帰るように伝える。

青年は青い顔をして急いだ様子でその場から姿を消した。その後Hが続く。

「何だったんだ?」

青年と少年が姿を消し、漸く『今』を理解し始めたサンジが最初に口を開いた。

「冗談だろ?アレが・・・【バベル】が完成しただと!」

質問したサンジのことも忘れて、Dはその場に膝を着けた。

呆然とするD。

絶望の色を見せ、すっかりうなだれてしまう。

「あ、あれ?」

「ん？どうした、チョッパー？」

皆がDに注目している中、チョッパーだけは異変に気が付いていた。

辺りをキョロキョロと見渡しているチョッパーに気が付いたのが、すぐ隣りで意味もなく仁王立ちしていたウソップだった。

「ルフィ、どこに行ったんだ？」

「「「！？！？」」」

その一言で皆は漸く気付く。

先程から船長であるルフィの姿が見えないのである。

辺りを搜索してみるも、どこにも人のいるような様子が無い。

海軍の姿を確認している一団には広い範囲を捜すことは出来なかった。

だが、狭い範囲とはいえ、これほどまでに人の気配を感じないということは……。

「考えたくはないけれど……」

「ああ。奴等に付いて行ったか、浚われたかのどっちかな」

「つたく、あのバカ……」

「あ、おい。どこ行く気だ？D!？」

トラブルメーカーの一団の長を捜しながら船員達は溜め息混じり

のぼやきを漏らした。

そんな船員達に背を向けて、今まで地に膝を着けていたDが急に立ち上がり、そのまま歩き始め木々達を掻き分ける。

その先には天へと伸びるように建つ巨大な塔。

若葉色の現在地とは打って変わって、真っ白な場所の先にある塔。随分離れているはずなのに、はっきりと見えるその全貌は圧倒されるようだった。

「なんつ・・・だ、ありゃあ!？」

「アレが俺の親父がいる場所”侮辱の塔”だ」

心の声を思わず口にしてしまったゾロに返すようにDが言った。

Dが称する”侮辱の塔”。

それは、先程の青年が言った【バベル】のことである。

D曰わく、ルフィはあの塔にいるはずだと云う。

その言葉に皆、覚悟を決める。

向かう場所があるのならば進むのみである。

「さて、そうと決まったところで・・・」

と、皆が覚悟を決めたのと同時にDが息を吸い込んだ。

そして・・・

「きゃああああ!!!」

今まで聞いたことの無い高い声で叫び声を上げたのだ。

まるで襲われた者のような悲鳴の後に、さほど遠くない場所から
敵つい男の声と茂みを掻き分ける音が聞こえた。

この場にいる者達以外の声だ。

草木の擦れ合う音と共に、葉巻の煙の臭いが漂う。

それで連想出来る人物は、この島に着いた時に肉眼で確認済みで
ある。

現れた人物は、声と同様に敵つい身体付きで無精髭の男性。口には
何本もの葉巻をくわえ、白いコートを羽織っていた。

「「「「「「「「「「

一時の『間』が生まれる。

「「「「「「「「「「

「お、お前ら！なんでここに！？」

現れた人物、スモーカーと皆が声を揃えて言った。

「仲間は多いほうがいいだろ？」

トラブルメーカーの船長さんを思わせる、ニシシシという笑いに

スモーカーが気付く。

葉巻が一本地面に落ちる。

Dの顔を見た途端、今までにない呆然とした表情となったのだ。

「^{アイズ}A・・・？」

Dに向けられたその名前の主はいない。

首を傾げるが、間違いということに気が付いていないようだ。

「お前・・・なんでココに？なんであの時、約束の場所に来なかった！？なんで・・・！！」

「ち、ちよっ・・・！ちよつと待て！俺はAじゃないDだ！！」

ここで漸く間違いと気付く。

思わず肩を掴み、力を入れてしまっていた手を離す。

「すまない、と一言謝ると後退るように身を引いた。」

「D？アナタ、何考えてんの？海軍なんて呼んじゃって・・・」

溜め息混じりにナミが問う。

もう諦めているのがよく分かる態度をとっている。

必要だから、とだけ言っつて話を進める。

賛否の有無も聞かず話を進めるDに、誰も何も言わなかった。

否、言えなかった。

「今からDが行おうとしていることは、誰もが今考えていたことだったからである。」

浚われた者の救出。

スモーカー達も仲間を捜していた。
眼鏡を掛けたド近眼の女性の海軍。

最初はいつものように道に迷っているのだと思っていたが、捜索をしている間にそうではないと気付いたのだ。

Dはそれを見透かし、文句の言えない話を切り出したのである。

向かう場所は【バベル】で間違いないのだが、それまでにしなければならぬことがあるらしい。

「今から四組に分かれて、各部にある神殿に行ってもらおう」

それには理由がある。

【バベル】に入るには鍵が必要となる。

勿論、建設者であるDの父とその子供達は既に鍵を持っている。

だが、一族の恥とまで言われたDは鍵を与えられてはいなかった。ただ、鍵の在処のみを教えられ、それを一週間もかけて集めなければならなくなったのだ。

今は大勢の味方がいる。

神殿のある四つの部に分かれて行動すれば、凡そ一日で済むだろう。

そして、チームが完成した。

夏部の神殿にナミ、チョッパー、ウソップ。

春部の神殿にサンジ、海軍兵二名。

秋部の神殿にロビン、ゾロ、海軍兵一名。

冬部の神殿にD、スモーカー、海軍兵一名。

今、【バベル】へ乗り込む者達がそれぞれの神殿へと進み出した。

第四話：神殿にて（夏部）

若葉色の草木、草花を掻き分けて神殿へ向かう者が三名。

進む度に姿がはつきりとしてくる建物がある。

そう、それが神殿だ。

「いよいよね……」

身体が緊張で覆われたように強張る。

だが、ゴクリと生唾を飲み込むと不思議と足が前に出た。
階段の一段目に足をかける二人。

……二人？

一つは蹄のついた短い足。

もう一つは、蒼い紐が編んで綺麗な刺繍の入った靴を履いた小さい足。

「お、おおお俺はココに残って、敵共の侵入を防いでやる！」

残りの一人、長い鼻が特徴的な少年、狙撃手のウソップが膝を振るわせて半ば泣き顔で言った。

泥棒兼航海士であるナミは振り返ってニコリと笑う。

だが、もちろんそんな事を許す訳も無く、ウソップの襟首を掴むと、神殿に向かって歩き始めるのだった。

外からの光が差し込んでいる為か意外と明るい神殿。
その内部を歩くナミ達。

ウソップは襟首を掴まれたまま、ぐったりとした様子で引きずられて
いる。

頭部には大きなタンコブ。

あまりにも拒否の叫び声を上げる為にナミが殴った痕である。

「ちょっと、何よこれ？」

急に立ち止まるナミ。

後ろを付いて来ていたチョッパーも顔を出す。

そこにあつたのは、巨大な扉だつた。

桃色と若葉色、橙色と白銀色の円が描かれた扉。

それを繋ぐ線が、変わった模様にも見えなくはない。

その高さはナミの倍以上もあつた。

頑張つて押ししたり、引いたりしてみるものの、扉はびくともしな
い。

「どーしろつてのよ……」

はぁ……。

と、溜息を吐く。

その息が扉の埃を薙ぎ払う。

ナミの溜息がぶつかったのは調度、白銀色の円の部分。

そこに浮かび上がるのは、何かが渦を巻いたような模様。

ナミは、はつとした様子で他の円の部分も埃を払ってみる。

「・・・やっぱり」

先程までの脱力感は何処へやら・・・。
瞳を輝かせたナミは、自分が殴って黙らせたウソップを叩き起
した。

「いつまで寝てんの！さっさと起きる！」

ゴチツ、といい音がして、大きなタンコブが膨らみ、漸くウソッ
プが目を覚ました。

「いつてええ！！！」

寝起きの為か、少々反応が鈍っているようだが、起こしたナミは
そんなことお構いなしのようだ。

現在の状況を簡単に説明することもなく、ただ一言。

「この緑色の所目掛けて、火の着いた何かを飛ばして。早く！」

若干、一言ではないがツッコまないでおこう。

力チヤ・・・。

はつきりと聞こえた音。

まるで、鍵が開いたような音。

ゴリラのような姿になったチョッパーが扉を押す。

先程までびくともしなかった扉がすんなり開く。

パラパラと砂埃が降り、岩が引きずられるような音が神殿の中に響く。

完全に開いた時、三人の目の前に現れたのは緋色に輝く台座だった。

「ウソップ、あんたが行きなさいよ」

「うえええっ!?!」

「あんた何もしてなかったんだから、妥当じゃない」

ウソップは拒否するが、ナミも引かない。

チョッパーが自ら志願するが、ナミがそれを却下する。

結局ウソップが行くことになり、トボトボと歩く。
緋色に輝く台座は、もう目と鼻の先。

そこにあるのは炎のエンブレムが画かれた若葉色の円い石盤だった。

それを手に取り、温もりを肌で感じる。

一瞬、我を忘れていたウソップは、すぐにナミ達の下へと戻ろうとした。

カチッ。

足元の違和感。 明らかに、この神殿は今手にしている石盤を護る建物。

そして、ここはその石盤があつた場所である。

ウソップは涙と鼻水を同時に流して、ナミ達に助けを求める。

それを踏んだ本人も、その姿を見ていた二人も、青い顔して固まっている。

誰にでも分かることだが、勿論ワナである。

しかし、いくら待ってもそのワナは発動しなかった。

恐る恐る足をどけてみるも、やはり何も起きない。

訳も分からず、安心したウソップは、ナミやチョッパーを追い抜いて一目散に走り抜けて行った。

ナミ達もつられて駆け出していた。

「・・・な、何も起きてない？」

「・・・みたいだな」

少しの間の後、何も起きない神殿を見つめてナミとチョッパーは
呟いた。

確かに何も起きない。

一安心した二人は、取り敢えずウソップを殴った。

「チョッパー、急ぎましょ。D達はもう目的地に到着しているはず
よ」

もう気が済んだのか、殴るのを止めたナミが満足した様子でチョ
ッパーに指示を出す。

ボロボロになったウソップを担ぎ、チョッパーは指示に従った。

計三名はDに言われた通り、ある目的地に向かって走り始めた。

第五話・神殿にて（春部）（前書き）

なんて会話の少ない・・・（T—T）

第五話：神殿にて（春部）

暑い森林を抜けると、そこにはピンク色の景色が広がっていた。
ハート型の花びらが宙を舞い、やがて真っ黒に身を包んだ金髪の
男の掌で動きを止めた。

チェリーの匂いがほのかに香り、男を含める三名の心を和ませた。

「ここが春部……か？」

「……そのようですね」

「彼女の言ったことが本当なら、もう神殿が見えてきてもいい頃で
すよね？」

金髪の男・サンジとは真逆に、残り二人は白い軍服を身に纏い、
それぞれ口を開いた。

しばらく獣道を歩くと古い建物を見つけた。

三人は神殿と瞬時に判断する。

三人は談話することもなく奥へと足を運び始めた。

ただ真っ直ぐの廊下を無言で歩く。

畏もない。

敵らしき者もない。

三人の脳裏に不安が過ぎつた時、目の前に巨大な扉が現れた。桃色と若葉色、橙色と白銀色の円が描かれた扉だ。必死になつて開けようとするも、巨大であるためかびくともしない。

”無理か・・・”と諦めたが、若葉色の部分が一瞬だけ輝いた。よく見れば、それぞれの円に絵が描かれてある。

桃色の円には水。

若葉色の円には火。

橙色の円には土。

白銀色の円には風。

これが扉の鍵であると気付いたサンジは、非常用に隠し持っていた水を桃色の円に掛けた。

ゴゴゴゴ・・・

空洞化した神殿に重い物が動くような音が響く。

カチツ、という乾いた音が続き桃色の円と橙色の円が一瞬だけ輝いた。

おそらく、秋部の神殿に向かった者達も鍵を開いたのであろう。先程までびくともしなかつた扉は男三人の力だけですんなり開いた。

開いた扉の先には、奥に続く廊下があった。

だが、先程よりは長くなさそうだ。

影の部分から蒼い光が見えているのだ。

三人は迷うことなくその道を歩き出した。

「ほお・・・」

目の前に広がるピンク色。それを目の当たりにして眩きが漏れた。部屋の中心に置かれた台座。その上に置かれた蒼く輝く物体。それは蒼く輝く桃色の石盤だった。桃色なのに蒼く輝くのも変な話したが、それはおそらく石盤に描かれた水と関係するのである。サンジは石盤を手取る。

「……ん？濡れてる？」

サンジの手に収まる程の石盤は湿っぽさがあった。だが、決して濡れているわけではない。感覚だけが湿っているのである。

「コ、コックさん！」

「なんだ!？」

「扉が……!!」

サンジが扉の方向に顔を向ける。そして、すぐ走り出した。何が起きたのか、扉が閉まっているらしいのだ。ゆっくりではあるが、現在地から走っても間に合うかは分からない。とにかく走った。

影が先程よりも範囲を増している。扉が閉まり始めている証拠だ。

なんとか間に合った二人の海軍の後方から、遅れてサンジの姿があった。

最後の力を振り絞り、地面を蹴り、スライディングの要領で閉まる扉を抜けた。

「あー・・・疲れた」

石盤をしっかりと握りしめたサンジの口から本心が漏だした。

心当たりの無い罫の発動が三人を混乱させる・・・。

そして、三人はDに言われた場所へと足を運び始めるのであった。

第六話：神殿にて（秋部）

「そっちじゃないわ、こっち」

グキッ！

「ヴラッ！？」

曲がり角が出る度に右へ曲がろうとするゾロに、ロビンは能力を使って方向を変える。

身体の向きを変えれば自然とそちらへ進むが、少々手荒なため、その度にゾロの苦痛な声が響いた。

暫くはその繰り返しだった。

そろそろ道が若葉色から赤色や黄色へと変わり始め、気温も下がっているようだ。

秋部に入ったのである。

速足を止め、辺りを見渡しながら歩く。

すると、古い建物が目に付いた。おそらく、アレが神殿だろう。

ロビンとゾロと海軍一名は無言の確認を取り、石の階段に足を掛けた。

「神殿の中は一本道だった。
そのため、ゾロの苦痛な叫びはなく順調に前に進んでいた。」

「あの・・・？」

「「??」」

真っ直ぐな道を進んでいると、気の弱そうな海軍兵が口を開いた。

「彼女・・・Dさんはどんな人なんです？」

「さあ？」

海軍兵の質問にロビンは正直に答えた。

実際、ロビンさえよく知らないのだ。仕方ない。

海軍兵は同じ質問をゾロに問た。

「見たまんまの奴だよ」

少し間ができたと思ったが、ゾロの返事は短いものだった。

「そういえば、貴方達どこで知り合ったのかしら？」

「ああ？いいだろ、んなこと」

ゾロの言葉は無視され、ロビンは海軍兵に質問を返した。

賞金首になっているなら、海軍には情報が通っていると思ったの
だろう。

その推理は見事に当たり、海軍兵はモジモジした態度で質問に答
える。

” 何故、Dが賞金首になったのか” について 。

元々、政府の味方である『海賊狩り』のDが賞金首になった理由
が不明なのだ。

ゾロのように気まぐれでなったとも思えない。

だが、ロビンが期待していたことまでは彼も知らないらしい。

知っているのは、彼女の母親が海賊だったということと、父親が
元革命家ということだけである。

理由がソレと言われれば確かに頷ける。だが、違うと言われれば、
それも頷けるのだ。

どうやら彼は新米らしい。

何故かスモーカーの隊に廻され、知らないうちにこの島に辿り着
いていたのだと話した。

「……？」

「行き止まりか」

立ち止まるロビンに尋ねる。だが、返事は無言で首を振るだけであった。

行き止まりなどではない。

微かだが、風が壁の向こうから吹き抜けて来る。

「下がってる」

そう言っつて、ゾロは刀を鞘から静かに抜いた。

身体を大きく開き、刀を構え”一刀流……”と呟く。

ロビン達が下がったのを見計らい、その剣技の名を口にした。

「”三十六煩惱鳳”！」

振るつた剣先から飛ぶ斬激。

空気が震えたかと思うと、その斬激は壁に当たっていた。だが、結果は虚しく鈍い音が響いただけであった。

パラパラと落ちる砂埃。

その下から浮かび上がる四つの印し。

砂埃が落ちたおかげで、目の前の物体が壁でないと分かる。

中心には僅かな隙間。

そして四つの円。

「……扉……ですか？」

そう、それは巨大な扉。

若葉色と桃色、橙色と白銀色の円が印された扉だった。

ゾロが埃を掃うと、掌に土がベツトリとついた。そんなこと気にもせず、ゾロはもう一度同じ技を繰り出そうと身を構える。

だが、それは止められた。

壁の正体が扉であり、何かが描かれている。

考古学者であるロビンが黙っているはずがない。

「!?!」

扉に触れようとしたとたん、若葉色の円が一瞬だけ輝いた。

それに驚いて咄嗟に手を引っ込める。

その一瞬を見逃したゾロが、再び手を触れた。

土のベツトリ付いた掌でだ。

それが『鍵』だと知らないロビンは絶句する。しかし、それも一時の間だけであった。

ゾロの触れた部分、そこは丁度橙色の円が描かれた場所だったのだ。

勿論『鍵』は開き、扉も男二人なら簡単に開けることが出来た。

そこで漸くその行動が『鍵』だと気が付く。

気付かない者もいるが・・・まあ、置いておこう。

カッーン、カッーンと冷えた石畳を蹴り付ける足音が三つ、それぞれのリズムで聞こえる。

「ああ?」

と、ゾロの疑問形の短い言葉が神殿の廊下に響き渡った。

「ですから、先程の続きですよ」

「Dとどこで出会ったのか・・・ね？」

勝手なことを想像して話し出す二人を背に、面倒臭さそうに頭をボリボリと搔く。

渋々ながら、話しを始めるのであった。

それは今から幾年か前のこと・・・。

「ぐえっ!!」 とある街でいくつも聞こえる悲鳴にもよく似た男達の声。

その声に重なるように聞こえるのは、中性的な子供の高飛車な笑い声だ。

「・・・？」

すぐ近くにいた剣士（駆け出し）は不意に足を止めた。振り返ると、野蠻そうな柄の悪いオヤジ達が、冷や汗を垂らしながら走って来ていた。

首を傾げ、取り敢えず避けようと身体を動かす。

「止める!!」

次の瞬間、剣士はその唐突な声に思わず反応していた。

肉眼では確認出来ない程速く、無駄の無い動きでオヤジ達の足を止めた。

剣士は自分に命令（？）した人物が後方から駆けて来るのを黙って見ていた。

「観念しやがれオッサン共！」

指を一本ずつゆっくりと折り、パキパキと乾いた音を響かせるその人物を剣士は止めていた。

嬉しそうな顔付きが一変して不機嫌そうになる。

殴ろうとしていた掌がオヤジの鼻先ギリギリの所で停止。

少年のようにも見えるその人物の白い髪が太陽の光に反射して綺麗だった。

「もういいだろ。そのオヤジ気絶してるぜ？」

「ああ？つんだ、テメー」

こんな騒動にわざわざ巻き込まれようとする者などいるはずもない。

それに気付いた白髪の少年（？）はガラツと表情を変え、にこやかな笑顔で剣士に握手を求めた。

「お前が止めてくれたのか。アリガトな」

「身体が勝手に反応しただけだ。礼なんか別にいらねえよ」

握手を拒否する剣士にムツとする様子もなく、白髪の少年は、そうか、と手を引っ込めた。

少年が次にとった行動はオヤジ達を縛り付けることだった。

両手を縛られ、一人一人繋がれたオヤジ達は肩を落として少年と共に歩き始める。

「どうすんだ？そのオッサン達」

「は？海軍の所に連れてくに決まってんじゃない」

少年の説明によると、このオッサン達はある海賊の一味なのだ

いう。

最近捕まえた海賊の残党がこの三人だったらしい。
そこで剣士は待ったを掛けた。

「その海賊って……コイツ等のことか!？」

少年にある指名手配の洋紙を見せる。

それを覗き見るようにして少年が確認する。どうやらその通りだ
ったようだ。

「お前!海賊狩りだったのか!？」

「お前もか?珍しいこともあるもんだな」

少年は驚いた様子もなくケラケラと笑っている。
剣士は驚いているのが顔に出ていた。

「俺はD^{デー}。お前の名前は？」

「ロロノア・ゾロ」

あっという間に橙色の石盤も手に入れ、神殿を出た所で話は終わった。

「そんなところだ」

それを聞いてロビンはクスリと笑った。

「昔からDはDだったのね？」

ロビンは納得した様子だったが、海軍の男はあまり納得していない様子だ。

結局、男は納得出来ないまま次の目的地へと向かうはめになったのだった。

第七話・神殿にて（冬部）

若葉色の景色を真つ直ぐ進み、茜色の道を過ぎると口から吐き出す息が白くなった。

そこから先は白銀の景色が広がる。

そこに、男とも女ともとれる中性的な声の溜め息が響いた。

「しつこいな。俺はDだって言ってるんだろ」

「だが・・・！」

先程からこの繰り返し。

Dはうんざりした様子でまた一つ溜め息を吐いた。

白銀色の景色、更に寒い！

だが、D達はそんなこと気にはしてられない。
気にならないのだ。

理由？

勿論、走っているからである。

冬部の神殿は【バベル】のすぐ近くにある。

反して言えば、夏部から一番遠くにある神殿でもあるのだ。

夏部の神殿や、その両隣の秋部の神殿と春部の神殿のように歩い

て行くには時間が掛かり過ぎる。
スモーカーの部下は着いて行けそうにもないと、途中で断念し船に戻った。

つまり、今この場にいるのはDとスモーカーの二人だけである。

暫く走っていると、なにやら古めかしい建物が目についた。
寒さが更に増す。

ふと、空を見上げれば白く、肌に触れればすぐ溶けてしまうものが降り始めていた。

「行くぞ、オッサン」

「オッサンじゃねえ!!」

Dとスモーカーの足は神殿の奥へと向かっていた。

これで何度目になるだろう。

見覚えがある巨大な扉。

そこに描かれた四つの円。それぞれ、若葉色、橙色、桃色、白銀色に塗り分けられている。

丁度、その場に立った時、若葉色の円が輝いた。

続いて橙色と桃色の円が輝く。

どうやら他のメンバーは鍵を開いたようだ。

残った鍵は白銀色の円の部分のみ。

鍵を開けるには円に描かれたものと同じものを捧げればいい。
描かれているのは竜巻のような渦。

「ここで最後だな」

Dは呟き、ふう……、と息を吹き掛ける。
すると、白銀色の円が更にも増して白く輝く。
ゆっくりと扉に手を掛け、腕に力を少しだけ加える。
そして、Dの能力の一つである”ゼロ”の能力を発動させた。

ゴゴゴ……。

そうゆっくりと扉は開く。

六つの悪魔の実の能力の中で二番目に厄介な”ゼロゼロの実”。
これは、Dが触れたものの全てをゼロにする。
効果があるのは触れている間だけ、というのが最大の欠点ではあるが、うまく使えばその逆もまたしかりである。

人が二人程入れるくらいに扉が開くと、Dはそのまま奥へと進み始めた。

石盤も手に入れ、あとはこの神殿の前で待つだけだ。
その間、隣にいる者しか話せる相手はいない。
つまり、暇なのである。

「なあ」

暇なのに嫌気が差したのか、Dからスモーカーに話し掛けた。
スモーカーは新しい葉巻に火を点けながら短く返事を返した。

「アンタはAとどんな関係なんだ？」

ボテッ。
ジュツ……。

思いも寄らない質問に、今点けたばかりの葉巻を雪の上に落とすてしまった。

つか、勿体な……。

「な、な、なあっ!？」

「あーあ、勿体ねえ。そんなに驚くことないだろ？アンタがさっきからしつこく聞いて来るからだぜ？」

Dにそう言われた瞬間、スモーカーの顔が真っ赤になった。何も言えず俯いてしまう。

その反応を見て、Dがニヤリと笑う。

「なあるほど。そーゆー仲だった訳だ……」

スモーカーの赤い顔が更に赤みを増す。湯気が出てきてもおかしくない程である。

だが、Dの次の一言がスモーカーの顔を強張らせた。

「……で、フラれたんだろ？」

「……っ!」

説明しようのない百面相を繰り返しながら慌てふためくスモーカー。

しばらく、その姿を見ながら笑い声が響いていたのだが……。
その、しばらく、の間はそれ程長いものではなかった。

「……」

急に黙るDの顔を心配そうに覗き見る。

そこには、悲しみに満ちた表情が隠れていた。

「？」

ゆっくりと口を開くが、声までは聞き取れない。

スモーカーは耳を澄ました。

「アンタを選べば……」

Dはそう言ったきり、また俯いてしまった。

なんのことが分からないが、悲しいことを思い出させてしまった
ようだ。

そう感じたスモーカーは、ただ一言、”すまん”と頭をさげた。

暫くすると四方からコチラへ向かう足音が聞こえてきた。

他の者達が集まり始めたのだ。

Dはいつの間にか笑顔に戻っていた。

だがそれは創られた笑顔。

仲間には弱い所を見せたくないのだろう。

その姿を遠巻きに見つめながら、スモーカーはDとAの影を照らし合わせていたのであった……。

……彼女に似ていると思いつつながら。

第八話：（外伝）彼と彼女（前書き）

だいぶ間が空いております。彼視線、彼女視線、作者視線となっております。

第八話：（外伝）彼と彼女

港には男がいた。

沈み行く緋い夕日を眺めながら・・・。

「・・・？」

男は耳を澄ませた。

なにかが聞こえる。

声だ・・・。女の・・・掠れたような小さな声。

「・・・！？海からか！！」

そう思った瞬間、もう既に男は海に飛び込んでいた。
揺れる波間に見える夕日のように緋い髪の人影。

目が醒めたら、知らない天井があった。

辺りを見渡してみたが、やはり知らない場所のようだ。

何故か毛布を被らされている。

それに……。

きゅるるる〜

いい匂いがする。

「起きたか？」

後ろから急に声を掛けられて思わず構えてしまった。

相手に殺意の気配は感じられなくて、安心して構えを解いた。

てか、花柄のエプロンにオタマ持って現れる者に殺意があってもこっちが困る。

「ああ。アンタが助けてくれたのか」

とりあえず、確認とお礼は済ませた。

朝食も御馳走になった。

あまり、美味しいとは言えないものだったが、不味くはなかった。

「すまない。助けてもらった上に朝食まで・・・」

「気にするな。俺はスモーカー、海軍に所属している」

「私はA^{アイス}」

男、スモーカーが海軍と聞いて思わず俯いてしまった。言っていることが本当なら、敵、ということになる。

どうやらコイツは下っ端らしい。私を追っているのは大将辺りだからな。

「すまないが私の剣を取ってくれないか？」

「ああ・・・これか？」

こんな所からはすぐに退散したい。

そう思った私は、スモーカーに剣を取るように言った。

私の剣、零式 は重い。

大体、人間一人分の重さがある。

それを軽々と持ち上げたコイツは凄いと思った。

スモーカーは私を伺うように見つめている。

”ドコに行く気だ？”とでも尋ねたいのだろう。

「いろいろと、すまなかつたな・・・アリガトウ」

私は、それだけ言い残してその場を後にした。

それから幾月か過ぎ、スモーカーもAも対なる生活を過ごしていた。

久しぶりに訪れた、まだ記憶にある街並。

彼女はその時のことを思い出しながら、陽気に市場へと辿り着く。見たことのある顔がちらほら・・・。

あまり己の正体を明かしていないからか、市場の住人達も気軽に声を掛けてくれる。

「その果物を一つ。ここのは新鮮だから覚えてた」

Aがそう言うと、満更でもないように店の主は照れ笑いを見せた。その隣で聞き覚えのある声が聞こえた。

あの時よりも少し低く、ドスの効いた声になってはいたが、忘れる訳がない。

Aにとっては命の恩人である。

彼女が声の主を見ると、男らしい体格の男性となっているソイツがいた。

「スモーカー？」

彼も気が付いた。

あの時と変わらない・・・否、少し大人びた彼女の存在に。

「^{アース}A!？」

これは・・・この出会いは運命だったのであるつか？
ならば、神は酷な存在である。

スモーカーは恋をした。

目の前にいる彼女に、Aに・・・。

『海賊』に・・・。

緋色の長髪。

後ろで髪を束ね、左側の目にはヘアーバンドをずらして隠すようにしている。

肌は褐色。

礼儀正しい女性。

それが、スモーカーが恋をした人物である。

だが、彼女は『海賊』。

【偉大なる航路】グランドラインにはまだ名は知られていないが、この辺の海に

は海軍の大將達が目の色を変えて追う『海賊』がいる。

緋色の長髪。

左目に虹色の瞳を持つ、褐色の肌の若い女。

『トランプ海賊団』の最期の生き残り。

たった五人だけの一味であったが、実力は海軍兵数百万人でも齒がたたない程の強さである。

船長の『ジョーカー』を始めとした計四名は、いずれも大將達の手には掛けられ既にこの世を去っていた。

勿論、下っ端であるスモーカーが知る訳もなく、Aの正体にも気付いていなかった。それが何よりの救いだっただ。

下っ端とはいえ、海軍は海軍だ。仲良くしていれば同じ海軍に狙われることはまず無い。

「あの時はすまなかった。なんのお返しも出来ず・・・」

「や、気にすんなよ。俺も気にしてねえし」

二人は並んで市場を歩く。

特に目的は無いが、あの位置ですっと立っていてもしょうがない。

あの後どうしてた？という、Aの一言からたわいもない会話が続き続いていた。

「お前、この後どうするんだ？」

そろそろ日も暮れてきて、少し肌寒くなるとスモーカーが聞いてきた。

この街に家はない。

船に戻る訳にもいかない。

宿に泊まる金もない。

なんの返事も出来ずにいると、スモーカーが呟いた。

「……いよ」

「は？」

「俺ん家、また来いよ」

Aは目を丸くした。

まさか、こんなめに……親切にされるなんて考えてもみなかったからだ。

「……いいのか？」

聞き間違いではないだろうか？と内心不安げな様子で尋ねる。

黙って頷くスモーカーを見て、Aは子供のように喜んだ。

それから数週間後。

スモーカーは息を切らして家に帰ってきた。

留守番をしていたAはただビックリしている。

「A！逃げよう！！」

そう言って、いそいそと荷物をまとめ始める。

「え？いや・・・どうした？」

Aが心配そうに覗き込む。

その顔は青く冷めていた。

なにかをぼそぼそと話すが聞こえてこない。

Aがもう一度耳を傾ける。

「・・・お前のことが上にバレた。船で逃げるぞ！俺も一緒に行く！お前が『死の切り札エース』であつても・・・」

「！？・・・知っていたのか？」

「ああ。この街の北東に停めてある船がお前のだつてこともな」

「っ・・・！」

Aはそれ以上何も言えなかった。

海軍とはいえ下っ端、否、下っ端とはいえ海軍なのだと痛感した。

知っていたさ。

Aを助けた時にはもう分かった。

でも、認めたくなくて自分の中で勝手に否定していた。

まさか、再会するなんて思ってもみなかった……。

やっぱり、Aが海賊ということは変えられなくて……。

自分の力不足に、自分が腹立たしくなる。

……覚悟はある！

俺は海軍を辞めてでも、Aを守る。Aと共に生きていきたい。

俺は、荷物をまとめ彼女に告げる。

「明日の朝、北東の船の前で待ってる」

たったそれだけ。

Aは驚いた顔のままだったが、黙って頷いた。

明朝、まだ辺りは薄暗い。

男は一人だった。

他に人の気配は感じられない。

彼女が来ていないのではなく、既に来た後……。

彼女の船は海から顔を覗かせる太陽に向かっていった。

第八話：（外伝）彼と彼女（後書き）

感想・評価 よろしくお願ひします

第九話・侮辱の塔にて「き」(前書き)

短いです
しばらく「侮辱の塔にて」シリーズが続きます

第九話：侮辱の塔にて「巻」

「いいな？俺達はそのまま”侮辱の塔”へ向かう。スモーカー以外の海軍達は別行動中のフランキーと合流しろ。ウソップ、お前もだ」

Dの強い意思が込められた合図と共に、四つの石盤を手に入れた麦わらの一味は【バベル】に、ウソップを先頭にその他の者はフランキーの下へと向かって森の中を駆け抜けた。

真っ白な森を抜けた先には、黄緑色の草花が辺りを覆い尽くしていた。

周りは木々が聳え立ち、中心には巨大な塔。

天まで届きそうな巨大な塔【バベル】を目の前にして、皆の動きが止まった。

目を大きく見開き、【バベル】を下から上までをマジマジと見つめている。

「何、突っ立ってんだ？いくぞ」

Dはそう言ってスタスタ進んで行く。

ふと足を止めたDの目の前には、皆が見たことのある巨大な扉があった。

四つの円が描かれたあの扉である。

神殿があった場所と同じ所に、石盤をはめ込む。地響きと共に現れたのは四つの扉。

その先は真つ暗で何も見えない。

「この四つの扉の先はどこも同じだ。その内の一つが近道になってる……らしい」

「らしい」？

最後の一言が気になったのか、ロビンの疑問の声がした。それを返すようにDは肩を竦めて、ああ……、と呟く。

「俺が試した訳じゃないからな。昔、母親に聞いたんだ」

「ちよつと待って。てことは、この”塔”は昔からあった、ってこと？【バベル】って、最近出来たんじゃないの？」

「いや、元々【バベル】と”侮辱の塔”は別物だ」

ナミの疑問をきっぱり返すと、Dは右端の扉へと足を運ぶ。

その道が一番慣れているからである。

Dは”一緒に来ないか？”とナミやチョッパーを誘うが、断固拒否されてしまった。

”他には……”と話を振り出すと、ゾロとスモーカーの二人が手を挙げた。

特に要望もなかった為、Dが適当に進む道を決めていく。拒否権は無い。

左端の扉にはサンジ。

その隣の扉にナミとロビン。

右端にはDとゾロとスモーカー。

その隣の扉にはチョッパーが振り当てられた。

嫌がる者もいたような気もするが、それはもう過去のこと。
ナミ達もそれ以上は何も言おうとはしなかった。

。 それぞれが進む先には、必ずルフィ達とDの父親がいるはず・・・

そう信じ、漸く【バベル】へと足を踏み入れるのであった。

【バベル】頂上。
そこには、捕らえられた海軍の女と麦わらの男、それを楽しそうに見つめている若い男がいる。

だが、少し様子が変である。

麦わらの男・・・勿論ルフィのことなのだが、やけに大人しい。
食べ物に吊られている訳ではない。

手足を縛られている海軍の女・・・タシギとは異なり、ルフィは若い男の隣で膝を着いている。

その姿はまるで”服従”を著したようだ。

「ルフィ、お前は私とここにいるのだ。私の遺伝子を引き継ぐ”悪魔”の代わりにな・・・」

「・・・ハイ。E^{イー}さま」

無表情な顔と言葉で返したルフィは、若い男・・・E^{イー}に背を向け腰を落とした。

ルフィの目前には金色の扉。

Eは待っている。

自分に服従した”Dの名を継ぐ者”の背と、いずれは開かれる金色の扉を眺めながら・・・。

” 悪魔 ” と称する娘の、苦情する姿を拝むことを。

第九話・侮辱の塔にて「き」(後書き)

フランキーの存在、忘れていませんか？(笑)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2671e/>

ONE PIECE ~隠された島と侮辱の塔~

2008年11月7日07時28分発行